

障害の重い子どもの目標設定とその妥当性（2）

—目標設定の手がかりとなる考え方の整理—

○徳永 豊 田中信利 古山 勝 一木 薫 吉川知夫

(福岡大学) (北九州市立大学) (千葉県立香取特別支援学校) (福岡教育大学) (国立特別支援教育総合研究所)

KEY WORDS : 重度・重複障害, 実態把握, 目標設定, 目標のつながり

1. 目的

重度・重複障害の子どもの指導において、実態把握や学習評価を教師間で共有するために、「Sスケール」や「学習到達度チェックリスト」(以下「チェックリスト」)を活用する取組が報告されている(徳永, 2006 等)。このチェックリストでは、教科の視点で学びの到達度を把握し、それをもとに学びの順序性を踏まえて目標が設定され、授業が展開されている。この取組において、目標設定として「目標設定のABC」、つまりA: 適用(Application), B: 幅(Breadth), C: チャレンジ(Challenge)が手がかりとなるとされている(徳永, 2016)。

しかしながら、「目標設定のABC」の詳細、また、それぞれの視点の特性、さらにA: 適用(Application), B: 幅(Breadth)の区別と具体例が整理されていない。

そこで、チェックリスト開発の手がかりとしたイギリスのPスケールの学びの順序性についての検討及びスコットランドの学習評価の考え方を踏まえ、実態把握を踏まえた目標設定について検討する。特にA: 適用(Application), B: 幅(Breadth)の特性と、それらを踏まえた目標設定について検討する。

2. 方法

スコットランドの学習評価研究、及びイギリスのPスケールの活用等をレビューし、実態把握から目標設定につながる課題やその過程を分析する。

3. 結果

イギリスの教育担当省(DfEE)は1998年に、学力向上の一環として、障害の重い子どもの目標設定に関するガイドを示した。そして個々の子どもの学び(progress)を把握するためにPスケールを導入した。2011年に、教育課程局(QCDA)は、このPスケールを活用して、個々の子どもの学びをどう把握するか(APP:Assessing pupils' progress)のガイドを示した。

このガイドでは、目標設定につながる学習評価に焦点が当てられ、詳細な学びの評価(assessment)が取りあげられた。発達初期の子どもの学習評価の難しさを解消するためにいくつかの考えが示された。例えば、子どもの学びについての概念が検討され、レベルを高める縦(linear)の学びと新たな状況への般化である横(lateral)の学びの考えが示された。

さらに、これらの学びについて、Scottish Government(2011)は、学習進歩と達成評価を検討する視点としてABCを提案している(図1)。

学びが広がり、積み上がる点を立体的に捉えている。学びの平面を、適用(A)の軸と幅(B)の軸による平面として、レベルが高まる軸をチャレンジ(C)としている。

レベルを高める縦(linear)の学びがチャレンジ(C)であり、横(lateral)の学びについては般化を含めた適用(A)の軸と学びの確からしさを高める幅(B)の軸で整理している。

これは障害が重度な子どもの学びのみでなく、カリキュラムに基づく学校教育の学習進歩と達成評価、目標設定の基本的な考え方として示されている。

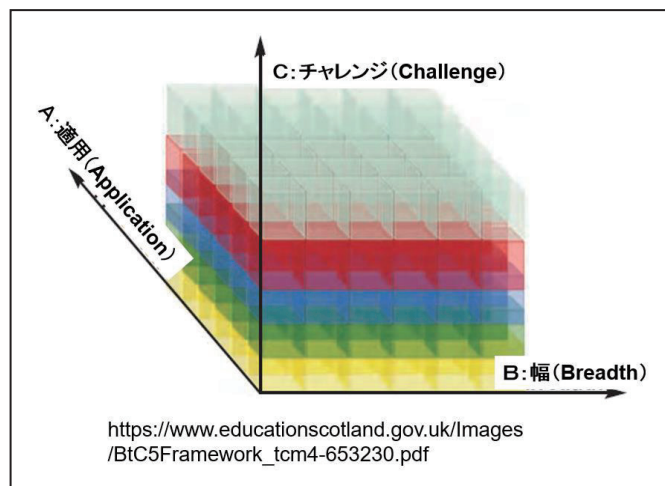


図1 目標設定のつながりを説明するためのABC

4. 考察

A: 適用(Application), B: 幅(Breadth), C: チャレンジ(Challenge)の具体例と妥当性については検討されている(徳永, 2016)。そこで、ここでは障害の重い子どもの目標設定を検討する上で重要と考えられる、A: 適用(Application), B: 幅(Breadth)について考察する。

A: 適用(Application)は、新規な馴染みのない文脈でのスキル等の活用とされている。馴染みのある人や状況、使い慣れた教材では、行動は生起するものの、新規な状況等において、スキル等を発揮することが課題となる場合がある。この点を踏まえた目標設定は、適用(Application)の視点からの目標であり、①人、物、②状況、文脈に左右されない柔軟性や適応力を高めることにつながる。

B: 幅(Breadth)は、経験の数や範囲とされており、馴染みのある文脈におけるスキル等の「確からしさの高まり」とされている。経験の広がり(broadening)が手がかりであり、①同じ種類の課題をさまざまなバリエーションで学習すること、②援助を受けながらの経験の広がりが含まれる。また、③体調・調子など子どもの状況に合わせた体験の広がりも含まれる。

障害が重度な子どもの目標設定については、C: チャレンジ(Challenge)の可能性を含め、A: 適用(Application), B: 幅(Breadth)の視点で検討することが求められ、これらの整理が課題となる。

【引用文献】

DfEE(1998) Supporting the Target Setting Process. /DfEE(2001) Supporting the Target Setting Process (revised) . / Ndaji,F.& Tymms,P.(2009)The P scales. Wiley-Blackwell. / QCDA(2011) Using the P scales to assess Pupils' Progress. / Scottish Government (2011) Curriculum for Excellence, Building the Curriculum 5.

(Yutaka Tokunaga, Nobutoshi Tanaka, Masaru Furuyama, Kaoru Ichiki and Tomoo Yoshikawa)